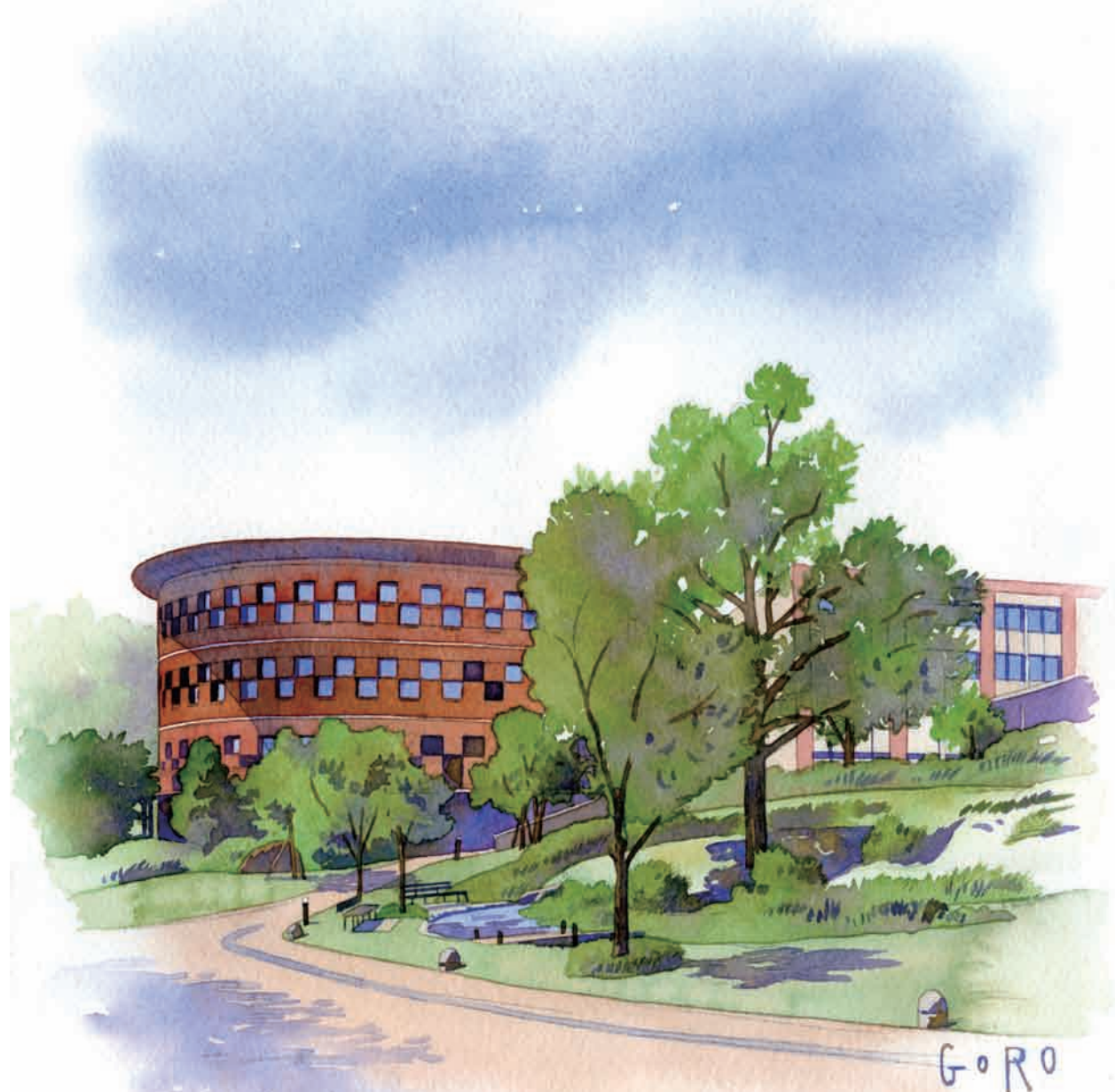


常磐

TOKIWA
vol. 14
Feb. 2010



 TOKIWA

表紙説明

常磐大学

本部棟（S棟）、学生ホール（T棟）

1999年竣工。S棟は、法人全体の管理運営を主管する事務棟である。T棟は、地下2階地上2階建てで、地下2階には柔道・剣道場、地下1階には学生支援センターが設置されている。センターでは、就職情報の提供や各種証明書発行、学生生活相談などが行われており、多くの学生が訪れる。1・2階は、カフェテリア兼ホールとなっていて、学生たちのコミュニティスペースとして利用されている。



イラストレーター／佐々木悟郎

常磐 TOKIWA
Feb. 2010
vol.14

発行日 2010年2月
発行 学校法人常磐大学
編集 常磐大学 広報課

〒310-8585 茨城県水戸市見和1丁目430-1
Tel. 029-232-2511 (代)
<http://www.tokiwa.ac.jp/>

CONTENTS

1 特集 法人開学100周年

次の100年を見据えて
～学校法人常磐大学 教育の基本理念
“世界的視野で考え、行動できる人間を育てる。”～

7 シリーズ「常磐・ひと・歴史」

私たちの夢は常磐で叶える

9 シリーズ トキワの風景 一学ぶ地編一

10 **キャンパスレポート**

学生生活の中から寄せられた声を紹介

11 **教員エッセイ**

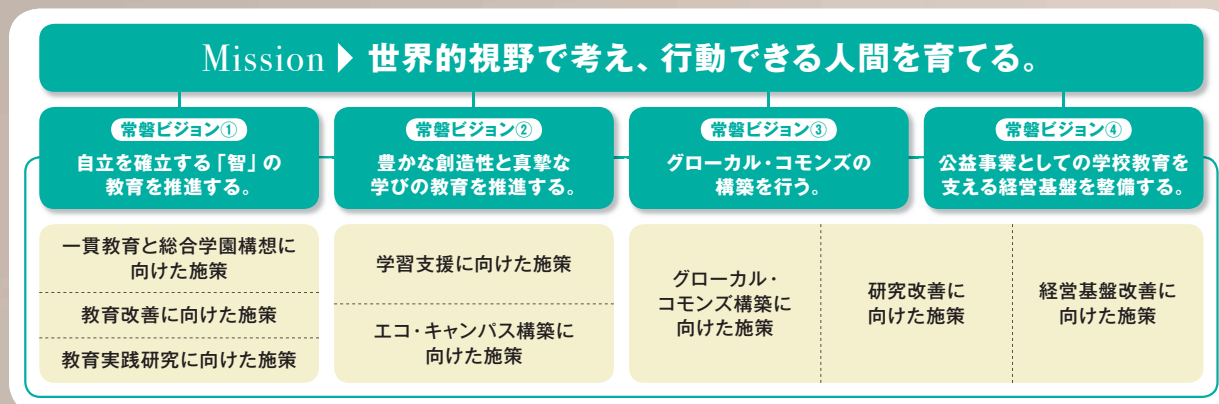
教員から寄せられた研究分野等の魅力や逸話を紹介

15 **TOKIWA NEWS**

トキワから旬な話題をお届けします


ANNIVERSARY

広報誌「常磐」では学校法人常磐大学開学100周年を記念し、全3回にわたる特集をお送りしています。最終回の今回は未来にスポットを当て、これからの常磐の姿を考えていきます。



次の100年を見据えて

～学校法人常磐大学 教育の基本理念
“世界的視野で考え、行動できる人間を育てる。”～

2009年、学校法人常磐大学は開学100周年を迎え、この節目に法人全体を貫く新たな教育の基本理念として「世界的視野で考え、行動できる人間を育てる。」というミッション〈Mission〉を策定しました。さらに2013年度までをその足固めの期間として4つのビジョンを設定し、その実践に取り組んでいこうとしています。この教育の基本理念において、その目的と意義、具体的な施策、未来に向けての抱負を、理事長ならびに各学校長、それぞれの立場から語っていただきました。

出席者

諸澤英道 学校法人常磐大学理事長
高木勇夫 常磐大学・常磐短期大学学長
浅岡廣一 常磐大学高等学校校長
小田卓爾 智学館中等教育学校校長
竹中治利 学校法人常磐大学常任理事
(司会) (100周年記念事業担当)
常磐大学幼稚園園長





新たな教育の基本理念への想い

竹中 創立者諸澤みよの人生観、社会観、学問への探求心は建学の精神として、その後の常磐の教育に受け継がれ、教育の基本理念のバックボーンになったと思います。「世界的視野で考え、行動できる人間を育てる。」という新しい理念にこめられた想いを諸澤理事長にお聞かせ願いたいと思います。

諸澤 創立者の諸澤みよは1909年に裁縫教授所を作ったわけですが、当時の日本はまだ封建制が色濃く支配し、男尊女卑の考え方も残っていた時代でした。そのような時代背景の中で、女性の自立のための教育が必要と考え、裁縫教授所が始められました。みよは、知識や技術を教授するだけでなく、人間的な成長を考えた人間教育を重視していました。

その当時から現在に至るまで、歴代の学校長はどのような教育目標を立ててきたか、校訓はどうであったか、100周年を機に改めて目を通してみました。高校では「至誠・自律・和協・勤労・感謝」という校訓を長く掲げていました。1966年の短大開設のころには、「広い視野、高い知性と教養、豊かな愛情、真摯な生活態度」を学生の理想像としました。この中で「真摯な生活態度」という言葉は、その後も大学に「自立」

「創造」「真摯」として受け継がれていますし、2000年に校訓を改めた高等学校では、「正しい自分になる」という言葉で継承されています。

「自立」「創造」「真摯」という言葉は、1983年に開学した常磐大学が10周年を迎えるにあたり、教育の理念を統しようとして策定したものです。現在では、法人のすべての学校でこの理念は共通の精神になっています。

このように、時代を背景にして教育の理念や校訓は少しずつの変化はありますが、貫して大切にしてきたのは「自立」です。一人ひとりの個の確立のための教育を目指し、その役割を果たすべく歩んできた歴史があります。

これからの時代は「世界的視野」が大切な視点となつてきます。「人間」「や」「人類」のことを考えることができるスケールの大きな人材が求められるのです。そういう時代の要請に応えた人間を育てていきたいと考え、新たに教育の基本理念を策定しました。

竹中 今回、私たちは教育の基本理念をミッションとして捉え、それを具現化するために4つのビジョンを掲げてランドデザインを策定しました。それについての理事長のお考えはいかがでしょうか。

柔軟な考え方やおよび人間性を教育の現場で育てていきます。

ビジョン④は、学校教育は極めて公益性の高い事業であると考えていますが、より良い教育環境を追求するために、健全な予算管理や適正

各学校組織における教育の方向性

竹中 このようなミッションとビジョンをもとに、各学校組織における今後の教育の方向性について、お考えをお聞かせください。

高木 近代社会は、工業生産を背景にして技術的な生産や資本集約的な生産を行って作り上げられました。また、これから来るべき未来は、私は知識産業社会と呼んでいますが、知識集約的な形での社会の動きが想定されます。そういった面で、「知」というものがこれまで以上に重要な意味を持つてくると考えています。グローバル化する現代社会においては、「知」の集合体である大学が、地域や家庭に埋もれている「知」を社会に還元するために、プラットフォームとしての機能を持つ必要があると考えています。

淺岡 高等学校では、長い歴史の中で、創立者の教育の理念を基底とした教育が実践されてきました。時代の変化、社会からの様々な要請を踏ま

え、教育内容、方法を改善し、充実に図つて、今日の伝統が築かれました。

現代社会は変化や変動を特徴とする時代であり、グローバル化現象が指摘されています。この変化する時代に求められるのは、自ら考え、判断し、行動できる自立した人間、世界的視野で考え、行動できる人間です。

本校は、校訓「頼れる自分になる」「正しい自分になる」「豊かな自分になる」を掲げ、時代が求める教育、生徒を中心においた、生徒の主体性を大事にする教育を進めています。

小田 智学館は開校して2年目の新しい学校ですが、100年の歴史の中から必然的に生まれてきた新しい教育の形と考えています。学校には私立と公立という二つの色分けがありますが、基本的な違いとして、私立学校には設立者とその後の歴史に関わってきた方々の教育の理念があります。その理念をどのように具現化するかが、私たちの務め

な運営を行っていくということです。具体的に言えば、授業料はできるだけ安くする努力をすべきであるし、そのために無駄のない経営をしていくことを、この機会に改めて見直していきたいと考えています。

諸澤 ビジョン①では、自ら考え、判断し、行動するための「智」を学ぶことを教育の第一目標として掲げています。例えば問題にぶつかったとき、それをどう捉え結論に導いていくかという考え方、そこで大事なことでそうでないことの判別ができる、といった思考ができるような指導を行っていきます。

ビジョン②は、母体である高校時代から引き継がれてきたことで、物事に真剣に真面目に取り組む生活の態度であり、豊かな人間性を育む



学校法人常磐大学常任理事
(100周年記念事業担当)
常磐大学幼稚園園長

竹中治利 (司会)

武蔵野音楽大学専攻科声楽専攻修了。常磐短期大学教授、常磐短期大学副学長を経て、2009年4月より現職。学校法人常磐大学常任理事(100周年記念事業担当・卒業生センター担当・施設設備担当)。



学校法人常磐大学理事長
諸澤英道

慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程修了。常磐大学副学長、学長を経て、2003年1月より現職。常磐大学大学院人間科学研究科博士課程(後期)教授。同大学院被害者学研究科、同大学国際被害者学研究所の教授を併任。



具体的な施策への期待

竹中 今回策定したミッションとビジョンを進めていくために、いくつかの施策を定めています。各学校組織で進めたいとお考えの具体的な施策について、伺いたいと思います。

淺岡 高等学校では校訓に基づき、一人ひとりの生徒の個性を尊重するということを教育の大きな柱として掲げています。甘やかすことでも自由にはさせるということでもなく、興味関心や優れたところを引き出し支援する教育を進めています。

本校の強みはこの教育力です。教職員全体で組織的かつ計画的な教育力の醸成が行われており、生徒の中には日本代表として海外に派遣されるなどスポーツや文化芸術活動で非常に良い結果を出しています。もう一つの強みは地域に支えられている学校であることです。地域からの強い期待、厚い信頼を強く感じており、それにお応えできような教育をさらに推し進めていきたいと考えています。

世界的な視野ということでは、海外の高校と提携して留学制度を実施し、また大学に留学してくる学生を本校にお招きして、ともに学ぶという取り組みもしています。

小田 智学館では、「智学館メソッド」という理念を掲げていますが、これは教育の基本で、真新しいことを

言っているわけではありません。しかしそれは、今日の日本の初等中等教育において見失われている部分でもあります。「気づきを高める」ということがメソッドの出発点で、常磐の理念にかなうような授業の形に作り上げることでできればと思っています。

具体的には新しいメソッドによる英語と理科教育を試みようとしています。ただし実験的に進めるのではなく、新しいメソッドが本当に子どもたちの教育に役立てるような教育の形を目指しています。

イギリスの私立学校では、いかなる教科の学習も人格の形成に供さなければ意味がない、と言われることがあります。彼らの事情は異なるにせよ、基本的には私たちも教科の授業を充実し、それが子どもたちの人間形成にまでおよぶように努力したいと思っています。

さらに海外との交流計画も近いうちに産声を上げるとしています。それが形だけの物見遊山に墮することなく、「世界的視野で考え行動できる」子どもたちを育成する確かな一助になることを期しています。

高木 学士力が問われるようになってきた現代、今年度から試行的に取り組んでいることのつに、基礎能力養成講座があります。先々は大学、

この先の100年を見据えた将来像

竹中 最後になりますが、法人全体あるいは各学校で、将来どんなことを見据えて教育に携わらなければならないか、ということをお願いしたいと思います。

諸澤 学校や教育が単なる知識を増やす場であるとするなら、各学校でそれぞれの期間を個別に分担するということはあり得ると思います。しかし、私学の特色として、どういう人間を育てたいかということについて貫いた教育を、長い期間をかけて行っていくことが可能であり大切です。常磐で学んだ人間がやがてその理念を

体現する人間になっていくということ、を、私たち教育者は共有していく必要があると考えています。

そのなかで、幼稚園、中等教育学校、高等学校、短大・大学、大学院と長く常磐で学びたいと考えてくれる方が少しでも増えるように、それぞれの連携・協力体制をしっかりと作っていく必要があると考えます。カリキュラムでもつながり、人間的にも成長していることが実感できる、そういう「貫教育を私たちは作つていかなければならない」と思います。

小田 幼稚園から大学まで貫くバックボーンつまり常磐の精神があつて、その精神を常磐大学高等学校も智学館も独自のアプローチで実現しながら大学までつながっていけば活気ある素晴らしい「貫教育の形が整う」のではないのでしょうか。

淺岡 高等学校では大学、短大、幼稚園、国際交流語学学習センターと「大学特別講座」、「幼児教育体験講座」、「語学研修講座」として教育過程に位置づけて指導に生かしてきました。高校教育と大学教育の円滑な接続、さらにはキャリア支援の視点から、高大連携の充実を図っていくことが重要と考えます。

高木 例えば、今、高等学校の教員と大学の教員が定期的に会合を行



常磐大学・常磐短期大学学長
高木 勇夫

日本大学大学院理工学研究科博士課程修了。日本大学教授、慶應義塾大学教授を経て、2005年4月より現職。常磐大学大学院コミュニティ振興学研究所教授、常磐大学コミュニティ振興学部教授。

短大、すべての学生を対象に行つていこうと考えています。

また、地域との連携にも力を入れているところです。2008年度から開始した読売新聞社水戸支局との連続市民講座や、自治体や地元企業の方々とも協同で様々な取り組みを始めています。大学を知的共創拠点として、様々な立場の方と学びあい、教えあい、助けあう関係を築いていきたいと考えています。



智学館中等教育学校校長
小田 卓爾

慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。オックスフォード大学へ留学、元慶應義塾大学文学部教授、元慶應義塾中等部長、元慶應義塾ニューヨーク学院院长。2009年4月より現職。

い、テキストを協同で創り上げるといふ提案も生まれています。教員という人的資源を、どう価値を生む資産にしていくかについて考えることは重要だと思っています。

竹中 開学100周年を機に、新しい教育の基本理念を掲げたことは、これからの常磐の教育の方向性を示すうえで非常に重要であると思います。常磐を形作る各学校組織が一つの理念のもとに、その実現に向けて、それぞれの課程における教育に専念することで、新たな価値が生まれてくることを確信しました。本日は、貴重なお話をありがとうございました。

智学館
中等教育
学校

人に“しあわせ”を
与えられる人

人に“しあわせ”を
与えられる人

夢は医療現場で働くことです。以前事故に遭った時、救急隊員の方が手当をしてくださり、人を救う仕事の素晴らしさに感動しました。今日指しているのは、不足と言われている小児科や産科の医師。智学館はそのために必要な英語力やグローバルな視野を学べる科目が多いので、積極的に学習していきたいです。

1年 小坂由佳莉

困ってる人を
助けられるような人

智学館
中等教育
学校

授業で、海外で活動する青年海外協力隊の方とネットテレビを使ってお話できる機会があり、自分もそんなふうになんかのために働けたらいいなと思うようになりました。生徒会長や実行委員などの役職には自ら手を挙げ、みんなの声に耳を傾け、役に立てるようにと日々心がけています。

2年 常井聖也

常磐大学
幼稚園

世界で活躍できる
歌手になりたい

世界で活躍できる
歌手になりたい

マイケル・ジャクソンのように世界で活躍できる歌手になりたいです。ステージでかわいい衣装を着て、歌ったり踊ったりする姿を、家族の人たちに親に来てもらいたいです。幼稚園では一輪車で遊ぶのが大好き。お友だちと一緒に練習するのが、いちばん楽しいです。

しらかば組 國谷こはる

カッコいい消防士さん
になりたい

常磐大学
幼稚園

大きくなったら、お仕事の説明で幼稚園に来てくれた消防士さんのようなカッコいい消防士さんになりたいです。高いところも怖がらないで、はしご車に登って火を消したいです。工作をしたり、お家でお父さんと一緒に絵を描くのも大好きなので、この絵もいっしょけんめい描きました。

さくら組 澤田真臣

日々の学びの原動力となる、一人ひとりが抱く大切な夢。
シリーズ最終回は、それぞれの学校で学ぶ常磐生たちに、
心に描いている将来の展望を聞いてみました。

常磐で叶える 私たちの夢は



法人開学100周年シリーズ
「常磐・ひと・歴史」

常磐大学
高等学校

たくさんの
笑顔とありがとうに
包まれたい

たくさんの笑顔と
“ありがとう”に包まれたい

子どもが好きで、子どもに関わる仕事に就きたいと思っています。今興味があるのはチャイルド・ライフ・スペシャリスト。病院などで病児をサポートする職業です。自分の可能性を広げればそれだけ夢の選択肢も広がると思うので、生徒会長などの活動や日々の自主学習を全力で頑張っています。

2年 武石紋世

常磐大学
大学院

ほっとできる
セラピストになりたいです

ほっとできる
セラピストになりたいです

学部生の時に自閉症児の発達支援に関わらせていただき、お子さんが笑顔になるとお母さんにも笑顔になってもらえることに感激しました。発達に困難を抱えている子どもの療育に携わりたいと思い、大学院に進み臨床心理士を目指して勉強中です。誰かを笑顔にする手助けのできる存在になりたいです。

人間科学研究科修士課程 1年 後藤かおり

広告の新しい
“未来”を作りたい

ゼロから何かを創り上げることに興味があります。ある授業で新しい広告の手法を知ったことがきっかけで、そういったものを手がける仕事をしてみたいと思いました。誰も見たことのない広告を作って、人々に喜んでもらえたら素晴らしいことだと思うし、そのことが自分の成長にもつながると信じています。

国際学部英米語学科 3年 坂本知之

常磐大学

広告の
新しい未来
を作りたい

常磐
短期大学

笑顔を絶やさな
保育士になる

笑顔を絶やさな
保育士になる

幼稚園の頃大好きだった、笑顔の優しい先生。私もそんな先生になりたいという想いが、今の学びにつながりました。その先生とは年賀状のやりとりをしていて、保育士への夢を応援してくださっています。「造形表現（指導法）」など、現場ですぐに役立ちそうな授業が多く、早く活かせればとワクワクしています。

幼児教育保育学科 2年 沼田千里

周りから必要とされる
人になりたい

常磐のバスケットボール部はチームワークが自慢。今年は国体代表や県代表に選出いただきましたが、先輩方の教えがあってこそその結果です。たくさんの方々を支えられて、知識だけでなく考え方も素晴らしい影響を受けました。僕も将来はスポーツに携わる仕事に就いて、誰かにとってそんな存在になりたいです。

2年 関口恵介

常磐大学
高等学校

周りから
必要とされる
人になりたい

光と影の存在

Campus Report 1

私は、新しく新設された「教育学科」の一期生として小学校の先生を目指し日々勉強に励んでいます。この学科に入学して改めて感じたこと、考えさせられたことや学んでいることがたくさんあります。今までとは違った視点で感じる授業内容や、普段何気なく生活していく中での一日一日の積み重ね、その一日の重みの感じ方、人一人ひとりによって考え方・感じ方・捉え方の違いからの新しい刺激、身近な体験からの新しい発想・捉え方などです。毎日が新しいことの連続でいっぱいです。

学んでいくと同時に自分という一人の人間を磨いていることも事実です。大学の授業での心に残る先生方の言葉・教材から学ぶ生活との関連性の発見。そして何より自分自身で授業の組み立てから受けるまでを、自分で考えて行動に移していくことを学んでいます。また私は県内の家から大学まで自分の車で通っているのですが、時間が小・中・高の時に比べ縛りがないため朝起きる時間や食事面、寝る時間までの生活のリズムや時間の使い方が大幅に自由になり、生活面でも同じように学んでいると感じています。

今こうして大学に通うことができること、たくさんの新しい友達ができること、知識を得て新しい考え

方や捉え方ができるようになることは、自分一人だけでできることではありません。今まで出会った先生方や先輩後輩、そして友達や家族などの支えや言葉の存在があって初めて成立していると思います。そして初めての出会いや自分の知らない面から受ける影響は、私自身はとても大きなものであると感じています。そんな新鮮な体験が日々できていることに感謝し、手に触れて感じることや目に見えたり聴こえてきたりしている部分だけでなく、見えていない部分を大切にしていけるように励んでいきたいと思っています。



常磐大学
人間科学部教育学科 2年
三浦翔平

行動から成長へ

Campus Report 2

学生生活も残すところあとわずかとなりました。振り返るととても楽しく充実したキャンパスライフを送ることができ、あっという間の2年間でした。

学生生活の中で就職活動は私にとってとてもいい経験になりました。就職活動を乗り越えられたから、より充実感を味わえ、成長したのだと思っています。

私の就職活動は、学校生活に慣れ始めた11月頃から始まりました。働くということなど、全然考えられないままスタートしたのです。何をすればいいのか全く分からない状況でしたが、とりあえず何か行動しようと思い、学内の就職バスツアーに参加しました。その後、興味を持った企業の説明会に積極的に参加しました。その中でいくつかの企業を受けましたが、うまくいかず悔し涙を流したこともありました。この悔しさをバネに就職活動にさらに力を入れ、希望していた地元の企業から7月に内定をいただきました。この時の喜びは今でもはっきり覚えています。

私は短い間でしたが、耕作放棄地を市民で管理するというNPO活動に参加していました。NPO活動をしている市民や他大学の学生と交流し、得ることがたくさんありました。面接ではこの活動について

も話しましたが、何よりこの活動を通してものの見方が広がるとともに、社会人と話す自信がついたことが就職活動にも役立ったと考えています。参加することができて本当によかったと思っています。自分の興味に基づいて、一歩足を踏み出すことの大切さも学びました。

これから残り少ない学生生活を思いっきり楽しみ、また就職先である金融業に関わる資格取得など、社会人になるための準備をしっかりとしていきたいと思っています。



常磐短期大学
キャリア教養学科 2年
鈴木杏奈

トキワの風景

学ぶ地編

常に地域とともに発展を続けてきた常磐。航空写真を過去にさかのぼると、時代の流れの中で移り変わるキャンパスが見えてきます。

空から見た見和キャンパス

常磐大学・常磐短期大学は徐々に校舎を増設しながら、キャンパスを拡大してきました。25年前の1985年から現在まで、空から撮影された写真を年代順に見てみると、その発展の様子が分かります。

1985



大学開学から2年。K棟が完成しました。赤い屋根の体育館脇にはプールが見えます。

1996



この年、常磐大学国際学部設置に合わせ、R棟が完成しました。

2000



常磐大学コミュニティ振興学部設置とともに、U棟・V棟が完成しました。幼稚園は現在の場所に移動しています。

2009



2005年のQs棟（情報メディアセンター）の完成を経た現在のようす。緑が豊かな広々としたキャンパスです。

地理学のリアリティ

私の研究分野は地理学（歴史地理学）で、常磐大学では主に教養科目（総合講座）として地理学関係科目を担当している。さすがに「昔前に言われていたような「地名・物産を憶える」ような地理教育は少なくなってきたというものの、そもそも高校の社会科で地理を選択する機会が少な

いせいか、地理学の本当の面白さを知らないまま入学してくる学生が多いようだ。地理の授業を通じて、地理学の面白さに気づいてもらおうと、私が口癖のようにいつていることが「地理学のリアリティ」である。

私が歴史地理学に初めて触れたのは、大学一年生の春、恩師・黒崎千晴先生の「歴史地理学概論」という講義だった。朝一時間目の授業での先生の第一声は、「おまえさんたち、朝飯食べてきたか？」であった。最初はその問いの意味をはかりかねていたのだが、しばらくして、歴史地理学という学問の神髄を刺激的なことはで教示されたのだとわかった。またある時は、「歴史地理学では、人がどうやって飯を食ってきたかを研究するのだ。どうやってつて言ったって、箸で食べていたとかいうことではないぞ」などと冗

談を交えながら、人々の生活そのもののあり方こそ、歴史地理学であるということを説かれた。「生活」の主体である人間の理解、生活の要素である「衣食住」、それを支える「生業」、その生活の場こそ地理学の研究対象である「地域」であると。高校までの「歴史」や「地理」という教科のイメージから脱しきれなかった大学一年生の私にとって、その背景の広がりや身近なものとの連関に対する指摘は、驚きとともに目からウロコが落ちた思いで、時間と空間の概念を「氣に身近なものへ引き寄せてくれた。まさにそれは学問のリアリティであり、その後、私が進学して研究を続けてみようという思いが芽生えた瞬間であったのかもしれない。

私は卒論・修論で、明治期の統計類を資料に計量地理学的手法を用いて近代日本の都市システムの研究を進めた。しかし論文の結論を顧みたときいつも隔靴搔痒の思いを拭いきれなかった。ご退官後も時々研究室にお見えになり「課外授業」をしてくださっていた黒崎先生に、そのことを言うと、言葉には出されなかったが「ようやくそこに気づいたか」と

いうような微笑をされながら、「おまえさんの論文から人の生活が見えるか？」と問われた。その時ようやく、計量的な手法を用いていかにも「科学的」に見えながらも、全体像がぼんやりした空中写真を眺めているような歯がゆさと違和感こそ、自分の研究に欠落しているリアリティなのだとつくづく感じたのであった。

その後、私は、資料の分析と並行して、地域に住む人々、とりわけ都市を演出する商家や有力者の動きを追うミクロスケールの研究を進めることにした。人間の生活が空間（地域）を形作っていくという地理学の根本に立ち返るとき、地域の要素たる人間に焦点を当てることの重要性は言うまでもない。ただ、数量的データをを用いてメソスケールにみた地域と、人々のリアルな動きからみた地域とをリンクさせて地域性や時代相を理解することは容易なことではない。今も、文書や統計資料などから当時の人間や地域のリアリティの認識やイマジネーションを十分に持ちつつ研究を進めることの難しさを感じながら、試行錯誤の日々を送っていると言つても過言ではない。こればかりは、フィールドワークを通じた「経験」の量と質の積み重ね以外に補完できるものはないのかもしれない。こうし



常磐大学
人間科学部 総合講座
准教授
河野敬一

筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程退学。専門：人文地理学、歴史地理学。日本地理学会、人文地理学会、歴史地理学会会員。

浮世絵の楽しみ

浮世絵が好きである。観るのも、蒐めるのも。

「浮世絵が好きです」と人について、「えっ、あの春画ですか？」などといわれることがあるが、その反応は一面正しいが、全面的に正しいものではない。というのも、春画（専門的には「偃息図（おそくず）の絵」という）は浮世絵のジャンルにしかすぎず、浮世絵＝春画、ではないからである。では、浮世絵とは何か。

浮世絵は、今からおよそ330年前、江戸時代延宝年間の頃、菱川師宣によつて始められたというのが定説となっている。それは都市の歓楽境（＝浮世）に材料を求めた時世風俗画の様式であり、表現手段として主に大量生産のできる版画形式（木版画）を用いる（一部、肉筆画もある）。師宣によつて墨摺絵（モノクロ）としてその様式の基礎がつけられた後、明和2年に鈴木春信により多色刷版画（カラー）が考案され、黄金期を迎えることになる。その主題は、美女・役者・力士などの人物画が中心で、その他遊里や芝居の情景、歴史画、花鳥画、風景画などに及ぶ。浮世絵の母胎は安土桃山時代の肉筆の風俗画・美人画にあるとされる。こうした浮世絵に興味を持つきつ

かけとなったのは、ある時知人から河鍋曉斎の話聞いたことである。曉斎とは幕末・明治初期の絵師であるが、その紹介に瞬く間に心を惹かれた。そこで見た画集の闊達な筆致の戯画は私の心を掴んで放さないものがあつたのである。これを機に浮世絵という表現様式に関心を持つことになった。爾後、様々な展覧会に行き、浮世絵そのものも贖う仕儀となった。

浮世絵の何処に興味を惹かれるのか。広重に『蒲原』というこの絵師畢生の作がある。雪明りに照らし出された情景は深閑とし、神秘的な世界が幻出されている。この画を初めて観た時は体に軽い電流が流れるような感覚を覚えた。以後、観るたびに精神が昇華される思いを持つ。美人画に目を転ずれば、歌麿の『婦人相学十躰 浮氣の相』という作品があるが、ミニマリズムの中で究極の美人像を描き出している。蠱惑的な眼差しは観る者をして別世界に誘う。その他、江戸時代ののどかな情景、燕の翩々と飛ぶ様、役者の見事な見得を切る様などなど、浪漫に満ちた浮世絵は現代のわれわれの心を魅了して放さないものがある。こうしたものを作品によつては手許において何時でも鑑賞できるのは無上の喜びといえる。

本物の浮世絵が買えるというところ、これまた「そんなもの買えるのですか？」と聞かれる。浮世絵とはどうも博物館などが館の奥深くに収蔵して、たまに展覧会が開かれた時にしかお目にかかれるものではない

ないものであれば数万円台から入手できるのである。それこそ学生でも本物の広重が手に入るのである。紙数が尽きた。まだまだ書きたいことがあるが、またの機会にしよう。

最後に、浮世絵愛好家であつた永井荷風の言を引いて小稿を閉じたい。「あ余は浮世絵を愛す。苦界十年親のために身を売りたる遊女が絵姿はわれを泣かしむ。竹格子の窓によりて唯だ茫然と流るる水を眺むる芸者の姿はわれを喜ばしむ。夜蕎麦売の行燈淋し

気に残る川端の夜景はわれを酔はしむ。」（『江戸芸術論』より）浮世絵は、まことにいじらしい芸術品なのである。



常磐短期大学
キャリア教養学科
准教授
李 精

慶應義塾大学大学院商学
研究科博士課程単位取得
満期退学。専門：会計学。
日本会計研究学会、国際
会計研究学会、東アジア
経済経営学会会員。

美術の答え

「美術に答えはない」とよく言われる。本当にそうなのだろうか。単なる逃げの口実だと思う。美術にも答えはある。正確には幾通りもの答えがある。例えば一枚の絵をどう描くか、どう見るかには、幾通りもの答えがある。しかもその答えには幅があつて、白か黒か0か100かのような唯一解があるわけではない。さらに、その答えは暫定的なもので、研究が進めば変わることもあるし、時代によつて変わることもある。自分で試行錯誤して探求し続けなければ、答えは出ない。簡単ではないし、すぐに解けもしない。奥深い。だからこそ面白い。

答えを見つけるにはどうすればいいのか。一つには、焦らず怠けず一歩一歩着実に取り組み続けることである。先述のようにすぐに見つかるようなものではない。昨今はすぐに成果を求める風潮も強いが、質と創造を望むなら、長い目で見ることは欠かせない。効率性より継続性が大事である。そして取り組み続けるにはそれに面白さを感じられるかどうかに関わってくるだろう。苦行のようにしても続かないだろう。面白さが感じられれば言われなくても

やつてしまふ。楽しんで続けている人にはかなわない。

もう一つには、考え込んで歩みを止めるのではなく、具体的に動くことである。自分の内だけで考え込んでいても考える材料はいつもと変わりばえしないし、頭の中の材料は捉えどころがないので扱いにくい。生産的な答えを出すのは難しいだろう。そうではなく、実物に触れたり、本を読んだり、音楽を聴いたり、人と話したり、具体的に動く。絵を描くのであれば、まずは手を動かす。上手くいかなくても何枚もスケッチする。ほかにも、他の作品を見たり、素材に触れたり、動き方は様々である。具体的に動くなかで何かがつながり、新たな視点が拓け、ひらめきも生じる。

そして、失敗を恐れないことである。本気で取り組みながら、壁にぶつかるものである。時には失敗もするだろう。しかし、それでよい。三歩進んで二歩下がるくらいでちょうどよい。これは決して冗談ではない。そうすることで何があつても揺るがない強固な地盤と柔軟に対応できるしなやかな軸がつくれるだろう。以上の考えは、学生時代に学んだ

ことによるところが大きい。よき師やよき友との出会いも大切な条件と言えるかもしれない。

さて、ここで私の取り組みの具体例を挙げたい。私は日本美術鑑賞方法を専門としているので、そこから一つ。光琳「紅白梅図屏風」の両隻間にわたつて描かれた流水のつながりにはずれがある。そのずれの解釈を軸とする鑑賞方法のある学会誌に発表した。元々流水はつながっており、破損や紛失のためにずれが生じたということも考えられるが、実物を見ても文献を調べても決定的な答えは見つからなかった。ただ、絵の構成として、流水がこれ以上幅広くあつては間延びしてしまう。流水がびったりつながつても窮屈な感じがする。私はこう考えた。最初から流水にずれはあつた。そのずれを鑑賞者が想像で補うことで作品を完成させることは、余白に代表される日本美術の非完結性というものに一般化できる。もちろん、流水のずれの解釈はこれだけ

2009年の出来事

2009年は、公私共に実に目まぐるしい年となった。就職して2年目、私にとっては昨年より随分短く感じた一年だった。

今年度、私の執務の中で大きなウェイトを占めたのは、やはり新型インフルエンザへの対応だった。現在もなお衰えを感じさせないこの厄介な新参者は、おそらく養護教諭生活の中で一生忘れられないものとなるだろう。

2009年4月にメキシコで発生し、瞬く間に世界中に広まった新型インフルエンザは6月中旬にはWHOによつて、パンデミック(世界的大流行)宣言された。時期を同じくして県内でも感染者が確認され、いよいよかと覚悟を決めたのを覚えてゐる。インフルエンザ・パンデミックは、21世紀では初めてのことであり、歴史で勉強したスペイン風邪やアジア風邪、香港風邪などと一定の周期で繰り返され、甚大な感染被害を残してきた。日進月歩の医学において、現代においてもパンデミックに至つたこのインフルエンザを恐ろしくも感じたが、それはすぐに使命感に取つて代わられた。とはいつても、何をどうすることが最善なのか分らないまま、近隣の学校では、次々と感染が判明し、休校や学年閉鎖の措置が取られ

ていった。保健室に来室する生徒の発熱に敏感になり、いつも頭の中はインフルエンザでいっぱいだった。

手指消毒剤の確保に奔走、県の私学振興室や水戸市教育委員会からの文書はインフルエンザの通知ばかり、インフルエンザ関係の研修会が増え、養護教諭仲間が集まれば、「インフルエンザどう?」が挨拶代わりであつた。新知識を得ながら私は何ができるか、何をすべきか、毎日そんなことを考えていた。

インフルエンザが発生したばかりの頃は、「いつ」「だれから」「どこで」感染したかが注目され、数日前からの行動が県のHPで発表されることもあつた。誰もが、水戸で一番目の感染者にはなりたくないと思つたことだろう。なぜ感染したのか、行動に問題があつたからではないか、と暗に感染者を否定する気持ちが働いてしまいがちな対応だったように感じていた。特に懸念したのは、生徒たちの間に、先に感染した者を茶化したり特別な目でみたりすることがないかということだった。

新しい型のインフルエンザなのだから免疫がなく、多くの人に感染する。これは、完全に防ぎきれないものだと思う。大切なのは、一人ひとり

が予防を自覚すること。うつらないように、そして、うつさないようにできるだけのことをして、感染した場合には早く対応すること。こう心掛けながら執務にあたつてゐる。また、生徒一人ひとりの中にそのような姿勢が見られるように導いていくことが第一であると考えている。

私自身の固定観念で、養護教諭は健康でなくてはならないと学生の頃から思うようになってしまった。煩くうがい・手洗いの徹底を呼びかける私が、インフルエンザにかかつていたら示しがつかない。

しかし、一方で、いつも心に留めてゐる言葉がある。ゲーテの「病は人間の属性である」、ナイチンゲールの「病氣は回復過程である」という二つの言葉だ。病は、常に人とともにあり、発症した時には、既に体の中では回復に向かつてゐるというのだ。医者でも病氣にかかる。ありとあらゆる予防をしても完璧を求めることは不可能である。そう考えれば要らないプレッシャーから解放される気がする。何だか矛盾しているが、そうやつて自分を励ましながら日々奮闘している。

私事だが、2009年10月に結婚式を挙げた。休日、挙式の準備

ではないし、「紅白梅図屏風」の鑑賞方法もこれだけではない。幾通りもある答えの一つである。

美術には幾通りもの答えがあると、いうことを記してきたが、これは美術に限つたことではない。様々な学問分野にも一般化されるし、もっと言えば、人生の様々な場面に当てはまる。簡単にはいかない、けれど奥深いのが人生だ。

常磐大学高等学校
教諭(美術科)
有田洋子

茨城大学大学院研究生を経て現職。鑑賞教育方法、特に日本美術を対象とした鑑賞教育方法が専門。



に追われつつも、携帯電話を文字通り常に身に携え、ことあるごとに関係職員と連絡を取り合つたり、保健所・私学振興室に相談したり、インフルエンザの対応に不備がないよう誠心誠意取り組み組んできた。人生の大イベントは、インフルエンザとともに忘れられない思い出になった。

今後も更なる感染拡大が心配だが、迅速かつ的確な対応に努め、智学館の生徒や教職員の健康を守つていきたいと考えている。

智学館中等教育学校
養護教諭
小川典子

茨城大学教育学部養護教諭養成課程卒業。長年の夢であった養護教諭の職に就いて2年目。



TOKIWA NEWS 大 学

国際会議への参加を通して、 学んだこと、発見したこと。

2009年8月に常磐大学を会場として開催された「第13回国際被害者学シンポジウム」は、47の国と地域から研究者や実務家約500名が参加した国際会議。運営スタッフとして携わった学生も多くいました。語学力を試す場として、また生きた国際交流の場として学ぶ機会を得た学生たちに、このシンポジウムがどのような経験になったかについて聞きました。

対応力が鍛えられた受付の仕事

世界で通用する英語力や文化を学んでいる国際学部英米語学科の三人。これまでも学科の行事や留学生



との交流会など、国際交流のお手伝いはしてきたのですが、今回のような規模の大きいものは三人とも初めての体験でした。担当となった係は三人とも総合受付。参加者の方々から質問や依頼を受ける窓口であり、臨機応変な対応が求められる責任の大きな仕事です。

「どのようなご要望があるか予測することができなかったので緊張の日々でした」と遠藤愛美さん。研究所のスタッフの方と相談しながら対応していったそうですが、課題は他にもありました。英語での対話には慣れているはずでしたが、「国や地域ごとのアクセントを聞き取れなかったり、相手の方が私の英語を聞き取れなかったり」と二重作祐香さんは振り返ります。「早急な対応が求められる現場でしたから、全てを理解しようとせず、必要な情報だけを聞き出すことに集中しました（遠藤さん）」とにかく状況を把握することが先決で、通じなければすぐに違う言葉で言い換えたり色々工夫をしました（二重作さん）と、対応しながらよりよい方法を探っていたそうです。



全体会で基調講演者のサポートをする西村さん

国際会議という場に学んだ成果

シンポジウムの全体会や分科会にも参加した西村奈都美さんは「被害者学というひとつのテーマで、国境なく議論し、知識や想いを共有しあえる場に立ち会えたことに感激しました。同時通訳の方のお仕事を間近に見られたのもいい経験になりました。学生のうちにこういう経験ができて、常磐に入ってよかったと実感しました」と感慨深く領きます。

6日間のお手伝いの中で得られたものはそれぞれにあり、二重作さんは「参加者の方と一緒に寮生活をしたことにより、仕事面以外でも仲良くなれました。韓国の大学院生とタイ法務省にお勤めの方とは今でもメールで連絡を取り合う友達になったのがとても貴重でした。運営スタッフの方々の協力体制や、共に達成感を味わう姿にも多くを学びました」。国際的なシンポジウムに少し



左から、西村奈都美さん、遠藤愛美さん、二重作祐香さん

TOKIWA NEWS 高 等 学 校

新たな伝統づくりに踏み出した「ときわ祭」 生徒の実践力を結集

37回目になる「ときわ祭」を担当するに当たり、毎回生徒たちが頑張って作り上げていますが、継承して育てる伝統行事が不足していることを考慮し、以下の方針を掲げて実施することにしました。①「後輩へ継承する伝統行事を創造する」②「自分たちが作り上げるときわ祭を継承し発展させる」の2点です。

その中で重視したのは、実践力でした。委員会を充実させ、実行委員会が積極的に企画・運営に取り組み、生徒一人ひとりの力を結集し、今を生きる在校生がときわ祭を共に作り上げる喜びを共有する事が大切と考えました。

2008年後期に実行委員会を立ち上げ、スローガンの募集と実施企画案の作成に取り組みしました。その中で「トルネードタワー（30cm四方のダンボール紙2500枚でタワーを作製）」と「影絵アート（『飛躍』をイメージし



た絵を、生徒達の寄せ書きで影絵風に作成）」が提案され、全クラスが取り組む全校参加企画が実施の運びとなりました。2009年に入り、前年度より役員として継続して実行委員になった生徒26名を中心に、新たに各クラスより選出された実行委員84名を迎え、大きな組織となりました。100名を超える会議は壮観でした。クラス行事・全体行事の企画運営等多くの負担が実行委員会にかかってきましたが、夏休みも登校してときわ祭の準備に取り組み、当日に臨みました。「新入生オリエンテーション」でのプレゼン・「中学生への学校説明会でのプレゼン」などにも携わりました。

一般公開日は、3753名のお客様をお迎えし、とても盛況でした。全学年で取り組んだトルネードタワーも大好評でした。

実行委員会は事前準備や当日の運営に積極的に参加して実践力を身に付けましたが、手探り状態の活動であり、実行委員100名の仕事分担や役割を明確にできず、意識を一つにまとめきれなかった点が残念でした。

しかし、創造する意識と実践力のアップ、運営ノウハウの蓄積など一

定の成果を上げ、最初の一步は踏み出せたと思います。

現1年生が先輩の思いを感じ取り「38回ときわ祭」に繋げてくれることを切に願っています。

（ときわ祭企画委員 成田安男）

成功に繋がった 1年間の入念な準備

ときわ祭の準備を始めてから当日までの約1年間を振り返ってみると、あつという間だったなど感じます。今年から、今までとは違ふときわ祭を作り上げるため、例年よりも早くから実行委員会を立ち上げました。大事な年に、実行委員長を務めることは、期待よりも、プレッシャーと不安を感じました。

頑張ろうと決意しましたが、何から手をつけていいのか分からない状態でした。それでも、新しいときわ祭をつくり上げるため、春休み・夏休みを返上して、何度も話し合いを行いました。その結果、今年からできるようなったことがたくさんありました。

当日となり、いよいよ「時代は常磐100年の歴史」のスローガンのもと、盛大にときわ祭が開催されました。1日目は雨でしたが、2日目は晴

天。充実した2日間を送ることができ、無事終了することができました。

私は、今年のときわ祭は、成功だったと思います。理由は、2日間とも全校全体が盛り上がりつつあるのを感じたから。目標の来場者数を遙かに超えることができたから。新企画であるトルネードタワー、影絵アートが好評だったから。そして、何よりときわ祭に関わったすべての人の協力があつたからだと思います。

私は、第37回ときわ祭実行委員長を務め、多くのことを経験できたことを本当に嬉しく思います。高校生活の1番の思い出になりました。

そして、次のときわ祭が、もっと良いものになると思います。

（ときわ祭実行委員長 3年12組菅原嬉良）



ときわ祭実行委員会の会議風景

お米作り

5月上旬、初めて苗を見た子どもたちは、「抹茶？ 葉っぱ……？」と何だか分からない様子でした。「これはね、苗って言って、大きくなると稲になって、お米になるんだよ」と伝える



田植えの日、代かきを初体験

と、「あ！ 去年の年長さんが田んぼで作っていたよね！」とワクワクする様子が見られました。そして、自分たちもお米づくりをしてみたいということになり、さっそく遊びの中で田んぼづくりが始まりました。まずは、田おこしです。冬の間、固くなった土を「お米の赤ちゃんのベッド、フカフカにしてあげないとね！」と一生懸命掘り起こしました。次に、栄養のある土を昨年の土と混ぜ、水を入れて田んぼが完成しました。いよいよ田植えの日。まずは裸足で代かきをして泥の感触を楽しみました。その後、そーっと苗を植えました。自分で植えた苗を見つめて嬉しそうにする子どもたちの笑顔が印象的でした。根付く

まで目を離せないで、毎日「溺れていないかな？ 倒れていないかな？」と観察を続けました。大分背が伸び、触ってみると、しっかりと根付いたことが分かりました。その後も、グングン大きくなる稲の観察と雑草取りを続けました。タニシやヤゴなどに会つこともできました。長い夏休みの間に、「穂」が顔を出しました。2学期、登園してきた子どもたちはその変化に驚き、興味をもって見つめていました。9月上旬、穂から白い花が咲き、初の中でお米が大きくなり、重さで穂が垂れ下がってきました。日当たりの加減で多少育ちが違いましたが、台風の強い雨・風にも負けず、立派な稲穂になりました。稲刈りまで、「すずめ」に食べられないようにと、「かかし」をつくり、お米を守ろうとする子どもたちの姿も見られました。10月中旬、いよいよ収穫をすることになりました。少し大きめのはきみを使った稲刈り（稲切り）。思ったよりもしっかりとした稲穂は、簡単には切れませんでした。切った稲穂は、数本ずつ束ねて「おだけ」にしました。「太陽の光をいっぱい受けておいしいお米になりますように……と、子どもたちの願いが込められました。10月下旬になり、脱穀と粃摺りを



おだけの様子

行いました。稲穂から粃だけにし、すり鉢とすりこぎ棒で粃から玄米にします。一回に出来る量は、手のひらにほんの数粒。気の遠くなるような作業でしたが、昔の人の知恵や苦勞の一部に触れ、子どもたちの心の中に「一粒でも無駄にはいけない」という気持ちが生まれたようでした。12月に精米をし、1月下旬には収穫祭を実施しました。子どもたちにとって自分たちで一生懸命育てたお米の味は特別だったようです。今回の「お米作り」を通して、子どもたちも教師も、なかなかできない貴重な体験をすることができました。一年を通じたこれらの「学び」が、子どもたちの生きる力に繋がっていければと考えています。

「0」から少しずつStep Up!

「子どもたちは行事を経るたびに、一段と大人になるものだ」と、教育の現場に身をおく者は実感するものです。まだ子どもたちの個性の色が淡いころには、特にそれが言えます。いやがうえにも、共同作業を通して自分の存在を見つめ直す機会となるからです。

智学館は、この秋、「智学館フェスティバル」と「智学館カップ」の二つの学校行事を開催しました。「かっこいい」横文字の名称はついていても、要するに世間で言う文化祭と運動会ではないか、など侮るなかれ。産声を上げたばかりの智学館にとって、この横文字に託した子どもたちと教職員は、夢は格別に大きいものでした。10月24日（土）の午前9時から正午



智学館フェスティバルでのクラスプレゼンテーション

までの半日、晴天の秋空のもとフェスティバルが行われました。そのテーマは「君の今越えてゆこう」です。生徒と教職員が合奏するオーブニングのファンファーレが、ウエストジムに高らかに響き渡り、開会を告げました。教科、部活動、保護者と教職員の作品や趣味などが2Fの教室に展示され、ウエストジムでは、演劇とクラスごとに編纂されたクラスプレゼンテーションが発表されました。どの展示やプレゼンテーションにも、遊戯に走ることのない、楽しい学びの場面が展開されています。一人ひとりの生徒が今の自分を乗り越え、それぞれの彩りと輝きを増していることが見て取れました。こうした伸びゆく個性が総体となって智学館のカラーが徐々に鮮明に映え渡ることでしょう。

折しも、フェスティバルのころ、インフルエンザの影響で一つのクラスが参加できなくなってしまいました。けれども、その子どもたちの夢を実現するために、次週の土曜日の午後、数時間のミニミニ・フェスティバルを開きました。生徒たちはもとより、駆けつけてくださいました保護者の皆さまにも喜んでいただけまし

た。体験を共有したいと願う「優しさ」と、それに喜びでこたえた「素直さ」を、これからも智学館の基本に据えたいと思っています。翌25日に開催予定のカップも11月3日に延期されました。休んだクラスの生徒たちも含めて、「すべての生徒が参加し観戦できるように」と配慮することです。



智学館カップ最終種目の綱引き

こうして、智学館カップは11月3日（火）に挙行されることになりました。この日も雲ひとつない紺碧の空が広がっています。午前中は、小吹グラウンドで個人と団体の競走が中心に行われました。教職員も挑戦したリレーは、教頭先生の号砲でスタートし、校長先生もアンカーとして10メートル50センチを駆け抜けました。ゴールしたあと、担架の必要はなかった！。午後は、智学館内の芝グラウンドで、サッカー、キックベース、綱引きの競技が行われました。学年やクラスを超えてチームを組んだので、競い合いの中にも新たな親睦が生まれたのです。

フェスティバルもカップも、通常の授業の合間をぬって仕上げたものです。むしろ、授業の延長線上で結んだ「学びの果実」と言えるでしょう。大勢の保護者の皆さんも惜しみない声援を送ってくださいました。

生徒会長の横田君さんがフェスティバルで掲げた「0」から少しずつStep Up! が、智学館で着実に実現されています。いまさらながら、智学館の生徒たちの想像力と創造力の豊かさに驚かされました。「智学館の生徒のレベルの高さを改めて実感した」これが、この秋、すべての教職員が抱いた確信です。